

平成22年6月22日現在

研究種目：基盤研究（B）

研究期間：2006～2009

課題番号：18320026

研究課題名（和文）伊藤仁齋・東涯の諸稿本 of 思想史的研究

研究課題名（英文）A Study of the Evolution of the Thought of Ito Jinsai and Togai as Seen in Successive Versions of Their Commentaries

研究代表者

丸谷 晃一（MARUYA KOICHI）

中部大学・人文学部・教授

研究者番号：50279999

研究成果の概要（和文）：

伊藤仁齋は、荻生徂徠と並んで近世日本を代表する思想家である。この仁齋の諸資料は、天理大学付属天理図書館古義堂文庫に残されている。そのうち仁齋の主著である『論語古義』稿本『林本』を活字化し、その活字化したものの書き下し文を作成した。

研究成果の概要（英文）：

Itō Jinsai was, together with Ogyū Sorai, a representative thinker in early modern Japan. The Kogidō Collection in the Tenri University Library holds various valuable manuscripts and primary sources related to Jinsai. Among these, I have prepared a printed edition, with a Japanese rendering of the original kanbun, of the so-called Rinpon draft of *Rongo kogi* (A Commentary on the Original Meaning of the *Analects*), one of Jinsai's most important works.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2006年度	3,000,000	900,000	3,900,000
2007年度	1,600,000	480,000	2,080,000
2008年度	1,100,000	330,000	1,430,000
2009年度	1,000,000	300,000	1,300,000
年度			
総計	6,700,000	2,010,000	8,710,000

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：哲学・思想史

キーワード：伊藤仁齋、伊藤東涯、論語古義、古義堂文庫、林本

## 1. 研究開始当初の背景

伊藤仁齋の主要な著作は、『論語古義』『孟子古義』『中庸發揮』『童子問』『語孟字義』などである。これらのうち前の三者は、仁齋の経典解釈を、後の二者は、仁齋の独自の説や、儒学用語の解説を展開させたものである。

本研究では、『論語古義』を取り上げる。その理由は次の通りである。仁齋は、孔子に「最上至極宇宙第一の聖人」という最大限の評価を与え、その孔子と門人達の問答を記し

た『論語』も同様に評価し、『孟子』を参考にしながら、『論語』の中に示された孔子の思想の回復に後半生を捧げる。

この仁齋の著作の中に示される「古義」という言葉に仁齋の思想の中心部分が示されている。すなわち、仁齋自身も若き頃、学んでいた朱子学の注釈書である『論語集註』は新注と呼ばれていた。この注釈書では、孔子の時代からはるかに後の南宋の時代に朱子独自の用語（例えば「理」や「本然の性」等）

を使用し、その用語によって経典が解釈される。その中には、朱子学独自の人間像も展開される。朱子学では、「心」の中の感情の奥底に本性としての「理」性が存在し、それ自体を完全なる「善」として捉える。その「理」性が感情を制御するならば、「善」が実践される。しかし、感情に突き動かされ、「理」性が見失われると、悪しき感情が生じる。よこしまな欲望などがそれである。そこで諸々の修養によって感情の制御が目指される。すなわち、「明鏡止水」、心の中の感情の起伏を抑えて一点の曇りがない状態を維持し、「理」性を発現させる。この朱子学の人間像を仁齋は「理」性による感情の抑圧と捉え、「心」を「理」性と感情とに区分することを否定し、多様な感情を全面的に肯定する。そして、後の時代、現時点からみれば、新しい時代に形成された朱子学の人間像を否定し、孔子の時代そのものの人間像、いわば古い時代の人間像に立ち戻ることの意義を強調する。それが「古義」の意味なのである。この朱子学批判に基づく『論語』の解釈を展開したものが『論語古義』である。

仁齋は、生涯、『論語古義』の改訂につとめ、自己の著作を刊行することはなかった。現在刊行されている仁齋の著作は、仁齋の息子である東涯が仁齋の死後に改訂を加えて、刊行したものである。家学の継承者とはいえ、仁齋とは異なった時代と世相の中で生きた東涯の思想は、仁齋のそれとは異なる。その東涯の思想の混入した経典解釈ではなく、仁齋の経典解釈そのものに検討を加えなければならない。この本研究を行うために東涯の思想に基づく『論語』理解と仁齋のそれとを比較した結果、両者の間には表現上の相異にとどまらない思想的異同が存在するという結論に到達した。そこで本研究では仁齋生前最後の稿本である『林本』を取り上げ、その手書きの稿本を活字化することにし、その内容に分析を加えた。そしてこの作業は、近世日本の儒学史初の本格的な『論語』解釈に分析を加えることを意味し、この仁齋の経典解釈が以後の儒教史に少なからざる影響を与えていることも明らかにした。その意味で『論語古義』『林本』に分析を加えた本研究は、近世儒学史研究の新たな地平を切り開いたと言える。

その経典解釈の作業において次の点にも留意した。『論語古義』には成立順に『第二本』、『誠修校本』、『元禄九年校本』、『元禄十六年定本』、『林本』という五種類の稿本が残されている。これらの稿本は、仁齋が校訂に参加したものである。具体的には、仁齋は、『論語古義』のうち現在残されている最初の稿本である『第二本』において原文に数回にわたる校訂を加え、それを弟子に清書させ、その原文を『誠修校本』の原文とし、そ

の原文に改訂を加えるという作業を繰り返し、また古義堂での仁齋の講義を弟子達が筆記したのも残されている。こうしたものは仁齋の校訂が加えられているかは不明だが、それをも参照した。

『論語古義』『林本』の『論語』各章の解釈を検討する際に、上記の四種類の稿本の解釈にも留意し、四種類の稿本を活字化し、内容上の比較も行った。この過程で弟子達の筆記録なども参照した。この作業によって仁齋の解釈形成過程、或いはその思想形成過程を明らかにすることができる。その際、特に『論語集註』、および『論語集註大全』との解釈との比較に留意した。こうした分析から、『第二本』段階では、仁齋が既に非難していた朱子学の解釈の視点などを多く採用し、それに改訂を加えることによって、仁齋の独自の解釈が成立していったことを明らかにした。

さらに仁齋の史料の中にはルビがふられたものや、仁齋自身の書き下し文が残されている。それを復元することによって仁齋の時代の漢文の読み方を明らかにすることができる。例えば現代では、「則」は、「れば則」と読まれるが、仁齋の読み方では、「ときは則ち」と読む。こうした仁齋の生きた時代の漢文読解の仕方が復元される。

このように稿本から読み起こされた仁齋の『論語』解釈の内容を以下では示す。この作業によって、仁齋における『論語』の受容史を明らかにする。仁齋は、外物に触れて感じる様々な人間の感情（「情」）を肯定する。しかし多様な感情を人間は抱く。この多様な感情を道徳実践の根拠に置くことができるのであろうか。仁齋は、この多様な「情」の中に共通性を見いだす。「目の美色を視んことを欲し、耳の好音を聴くかんと欲し、口の美味を食らわんと欲し、四支の安逸を得んことを欲す。是れ情」と。この感覚器官の共有性こそが「情」の共通性を形成する。そしてさらに『孟子』の「四端の心の拡充」論に着目する。「四端の心」は、「惻隠、羞惡、辞讓、是非の心」を指す。どんな悪人でも、井戸に落ちそうになった子供を見れば、すぐに駆け寄って助けようとする。この自然な、しかも人間固有の感情こそが「惻隠の心」なのである。その初めは小さな、しかも無自覚な感情であった「四端の心」を押し広げ、それを自覚化する。このように仁齋は、「情」的志向の中に人間の共通性を見だし、それを「善」と捉える。これが仁齋の「性善」説なのである。いわば「情」的「性善」論を仁齋は主張したのである。

さらにこの感情を自覚化するために「忠恕」を重視し、それに仁齋の独自の解釈を与える。「忠恕」とは、相手の行動の是非を自己の物差しだけで判断するのではなく、その行動に駆り立てる相手の気持ちを徹底的に

付度し、それをあたかも自分のことのように考えることである。それを実践するならば、自分に対する相手の行動や態度にやむにやまれぬわけがあると感ずることができる。そうなれば、相手を咎めるのではなく、相手をゆるす寛容な気持ちが湧き出てくる。ここに自分と相手とを豊かな愛情でつなぐ人間関係が構築され、その総体が「人倫日用の道」とされるのである。

こうした仁齋独自の思想が『論語古義』の読解によって明らかにされ、それを近世日本思想史の中に位置づける。この作業によって、日本における儒教の受容の有様様が明らかにされ、さらに仁齋の古義学に刺激を受けた荻生徂徠は、それをさらに深め、古文辞学を展開する。そして徂徠の刺激を受けた本居宣長が、日本古代に『古事記』を通して迫る議論を展開する。こうした日本思想史上の流れが示唆される。

伊藤仁齋の思想は、次のような思想圏において構成されたと言える。仁齋の初めの妻（嘉那）の父は、浅野因幡守尾形元安、富商の尾形元真は従兄、芸術家、尾形光琳・乾山は従弟であり、また仁齋の母方は、連歌師の里村紹巴の孫、玄仲の子である。さらには仁齋は、公家との交際もあった。このように仁齋の思想は、京都の雅な文化によって育まれてきたと言える。それ故に大江、菅原、藤原三家の博士家との影響関係も想定できる。また堀川を隔てた対岸には山崎闇齋の塾があったから、闇齋学派のいわゆる「嘉点」も仁齋の視野の隅にはあったであろう。さらには契沖の歴史的仮名遣いの革新との関係も存在していた。その意味において京都の町衆の文化の中で仁齋の思想は形成されたと言える。

## 2. 研究の目的

伊藤仁齋の著作は、天理大学付属天理図書館にほぼ完全な形で残されている。しかしその著作は活字化されてはいない。平成十八年段階では、『林本』は刊行されてはいなかった。それが近世日本の儒学史研究、さらには近世日本思想史研究の大きな障壁となっていた。そこで本研究では、『林本』をテキストとして採用し、その手書きの稿本『林本』を活字化し、その書き下し文を作成することを立案した。

## 3. 研究の方法

手書きの稿本である『林本』を判読し、活字化したものを三回にわたって校訂した。その際『林本』にも改訂が加えられている部分がある。その判読は行った。しかしそれが仁齋の手によるものか、或いは東涯によるものかは、明らかにされてはいない。それ故、その改訂は、補注のような形で『論語古義』『林

本』の刊行の際には処理したいと考えている。

## 4. 研究成果

『論語古義』『林本』の活字本が完成し、その活字本が天理大学付属天理図書館の許可を得てペリカン社（〒113-0033 東京都文京区本郷1-28-36、担当者 宮田研二）から刊行されることが決定した。現時点では、刊行のための三校目を行っているところである。

## 5. 主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計3件）

- ① 片岡 龍、儒教に対する使命感と諦念、『茶山学』11号、2007、査読有、p55～57
- ② 中田喜万、伊藤仁齋の「義」と「命」—ある反基礎づけ主義の出発—、『政治思想史研究』第7号、査読有、2007、p91～117
- ③ 荻部 直、「血」と「君徳」、『岩波講座 憲法 変容する統治システム』第4巻、査読有、2007、p53～73

〔学会発表〕（計1件）

- ① 片岡 龍、伊藤仁齋における『孟子』、第五回日本漢学国際学術検討会、2008年3月29日、国立台湾大学文学院

〔図書〕（計4件）

- ① 丸谷晃一、諏訪春雄他監修『日本古典への誘い 100 選 I』（東京書籍、2006）p372～379
- ② 荻部 直、『丸山眞男—リベラリストの肖像』（岩波書店、2006）228 ページ
- ③ 荻部 直、『移りゆく教養』（NTT出版、2007）、252 ページ
- ④ 荻部 直・片岡 龍、『日本思想史ハンドブック』（新書館、2008）、238 ページ

## 6. 研究組織

### (1) 研究代表者

丸谷 晃一 (MARUYA KOICHI)  
中部大学・人文学部・教授  
研究者番号：50279999

### (2) 研究分担者

無し

### (3) 連携研究者

荻部 直 (KARUBE TADASHI)  
東京大学・政治学研究所・教授  
研究者番号：00261941  
(H18～19 研究分担者)

末木 恭彦 (SUEKI YASUHIKO)

駒澤大学・総合教育研究部・教授  
研究者番号：60143335  
(H18～19 研究分担者)

片岡 龍 (KATAOKA RYU)  
東北大学・文学研究科・准教授  
研究者番号：50400205  
(H18～19 研究分担者)

遠山 敦 (TOYAMA ATSUSHI)  
三重大学・人文学部・教授  
研究者番号：70212066  
(H18～19 研究分担者)

中田 喜万 (NAKADA YOSHIKAZU)  
学習院大学・法学部・教授  
研究者番号：50406873  
(H18～19 研究分担者)